7 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 7 月 2 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 6 主日
■説　教：　保科けい子 牧師
■説教題：「　神が清めた物　」
■聖　書：使徒言行録 11 章 1～18 節（新約 p234～235）
■讃美歌：352「　来たれ　全能の主、」
　　529「　主よ、わが身を　」

イエス・キリストを私自身の救い主として告白し、信仰者として歩みだした50年以上も前に、「使徒言行録には時代を超えて多くのキリスト者を生かし続けている御言葉がいくつもある」ということを何度も教えられました。もちろん、使徒言行録に限らず聖書の御言葉はみなそのようなものだと思います。けれども7月の5回の主日礼拝は、使徒言行録の中で特に印象に残る御言葉を取り上げて、ご一緒に考えてまいりたいと思います。本日の聖書箇所は日本基督教団で定めている使徒言行録11章の前半ですが、直前の10章との関連で読んでまいりたいと思います。なぜなら、本日の箇所は、10章に記されている使徒ペトロとカイサリアにいるローマ帝国の軍隊の百人隊長であるコルネリウスという人物とその家族との関わりを、エルサレム教会に報告するという形で記されているからです。そして、特に注目したいのは、10章の34節35節に記されている使徒ペトロが語った言葉です。「34 神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。35 どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」私たち自身が主なる神様について考えるときに深く慰められる言葉の一つである、と私は捉えて生かされてきました。ペトロがそのような確信によって異邦人であるコルネリウスに主イエス・キリストの福音を宣べ伝えていた時、「**御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った**」のです。使徒たちによる異邦人への伝道の開始はそのようにして始められました。何よりも驚くべき出来事は、ユダヤ人である使徒たちが、ユダヤ人の救い主メシアであると信じた主イエスの福音をユダヤ人以外の異邦人にまで告げ広め、彼らもその救いに与る者であるとして受け入れたことです。なぜなら、使徒たちの中には、神様の選ばれた民はユダヤ人であり神様の救いに与かるのはユダヤ人のみである、という祖先からずっと受け継いできた民族としての誇りがあったのですから、そのような価値観を乗り越えるにはどれほど大きな力が働いたかと考えさせられるからです。

本日の箇所11章1節から3節までは、前述した10章で描かれているペトロの異邦人に対する伝道とその成果がエルサレム教会に残っていた使徒たちとユダヤ人たちによって疑問視され、非難や反発を招いたことが記されています。ユダヤ人たちは異邦人を汚れた者とし、その汚れが自分に移らないように異邦人との交際を極力避け、その家に入って

食事を共にしないということで神の民としての清さを保とうとしていました。だからこそ、その相手が当時の社会の支配階級であったローマ帝国の軍隊の百人隊長であるコルネリウスという人とその家族であったとしても、使徒たちの中心人物であったペトロが異邦人の家に客となり、一緒に食事をしたというのは、律法で禁じられていることでもあり許しがたいことでした。ペトロ自身もそのことを十分に意識していたことは、10章28節に「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。」と記されていることからわかります。

そこで、ペトロは彼自身が見た幻から順を追って事の次第を説明し始めました。それが11章4節以下に記されています。詳しくは10章に書かれていますが、11章でもほとんど同じ内容の記述が繰り返されています。まず、ペトロが祈りの中で示された幻において、清くない物や汚れた物とされていた動物たちの入った大きな風呂敷包みが天から彼の前に吊るされてきて、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」という声が聞こえたことが記されています。彼がそれに対して、「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にしたことがありません」と拒むと、再び、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」という天からの声がありました。この同じ幻を三度繰り返して見たこと、また丁度その時、カイサリアからコルネリウスの使いの者が到着し、霊が「ためらわないで一緒に行きなさい」と命じたことが使徒ペトロを動かしたのです。そしてコルネリウスもまた、天使によって、「ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる」と告げられたのです。そのように状況が一つ一つ整えられて、ペトロはカイサリアに出向いて、コルネリウスたちに主イエスの福音を語りました。まさにその時、聖霊の賜物が異邦人の上に注がれました。ペトロたちは、そのことを驚きながら確かに見たのです。ですから、ペトロはそれらのことをエルサレム教会で報告したのです。ペトロ自身は、異邦人の家に客となり共に食事をしたことが先祖伝来の律法を破っているということに十分気づいていましたが、しかしそのことを神様ご自身が求めておられるのだという確信に至ったので、敢えて律法を破り神様のみ心に従ってそのことをしたのです。その確信とは、最初に取り上げましたが、「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。35 どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」という言葉に示されています。このことに最も驚いているのはペトロ自身です。その驚きの体験を、彼は仲間の使徒たちに語ったのです。そして、そのように人前で語ることによってペトロ自身は一回りも二回りも成長していったのだと思います。キリスト教会でなされる「証し」の原型の一つは、このペトロの説明にも見られるかもしれません。

このペトロの話を聞いたエルサレムの教会のユダヤ人信徒たちはどうしたか。それが１８節です。「この言葉を聞いて人々は静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』と言って、神を賛美した」。彼らは静まりました。沈黙したのです。そしてそこから、神様への賛美の声が上がりました。イスラエルのみの主であると思っていた神様が、異邦人にも悔い改めとそれによる命を与えて下さった、その偉大なみ業をエルサレムの教会に集っていた人々は受け入れ、神様を賛美したのです。ここにも、初代教会の確かな営みを見ることができるのではないでしょうか。ここから、キリスト教会は民族や人種を問わず、広く御言葉を宣べ伝え始めました。私たちもまた、様々の方々に御言葉を宣べ伝えています。しかし、そこにはいつでも、自分自身を安全圏に置き「あの方はキリスト教会にふさわしい」「あの方はもう少し」などと、初代教会以来続いている人を分け隔てする考えが潜んでいるのではないかと思います。まさに、そのような私たちの心の奥底にある深い罪をしっかり見つめてくださり、そこから救い出すために主イエス・キリストの十字架があることを覚えたいと思います